

特別講演



東京医科大学から世界へ発信
— 国際医学情報学講座の
過去・現在・未来 —

From Tokyo Medical University to the World :
Past, Present and Future of the Department of
International Medical Communications

J. P. バロン

J. P. Barron

国際医学情報学講座

The Department of International Medical Communications

1970年春、私は初めて東京医科大学外科の主任教授の早田義博先生に出会った。それから10年間、早田先生のご紹介で、様々な国内外の、特に胸部外科、内科、病理などの先生方と知り合うことができた。その10年間で、私は、いかに日本の医学が優れているか、その一方、日本人の研究者・医師がいかに不利な立場にあるかを痛感した。1980年、私は、聖マリアンナ医科大学の当時の学長、戸栗栄三先生に招かれて、英語の助教授になったが、次第に、何とか日本の医学英語の分野を確立したいと思うようになった。当時の日本には、医学英語 (medical English) という概念がまったくなく、語学の教員のみならず、非常に驚いたことに、臨床医の多くもそれに反対していた。時々「医学英語なんて、そんな分野はないですよ」と言われたこともある。そんな中、私は1982年、Medical Foreign Languages Association という研究会を作ろうと思いつき、全国にアンケートを出したが、加入希望者は、アンケート

を送付した400人中、私を含めてわずか4人しかおらず、実現はしなかった。やがて1991年に、後述するが、東京医大に国際医学情報センターができ、私はセンター長となり、その2年後、本学で、任意参加の研究会、Medical Interpreters and Translators Association を設立。今も毎月第3水曜日の夜、病院内で会合を開き、医学通訳・医学翻訳・医学英語教育など様々な分野の会員が交代で講演を行い、お互いに研鑽を積んでいる (<http://www.linguamedica.jp/mita/>)。3年後、Japan Society for Medical English Education (日本医学英語教育学会) が当時、浜松医科大学脳神経外科の植村研一先生により設立され、以後、臨床医と語学専門家の間で、医学英語が必要だとの認識が徐々に高まり、現在、医学英語を取り巻く環境は、30年、40年前のそれとはまったく異なっている。

それでは、これから、教育、情報の発信、研究課題も含め将来の展望につき、説明をしてゆきたい。

2010年11月6日 第166回東京医科大学医学会総会における特別講演

キーワード：医学英語、卒前教育、卒後教育、標準化、e-learning、出版倫理

(別冊請求先：〒160-0023 東京都新宿区西新宿6-7-1 東京医科大学国際医学情報学講座 J.P.バロン)

TEL：03-3342-6111 (内線：5921) E-mail：jpb@imcc-tmu.jp

教 育

1. 卒前教育

東京医科大学では、臨床の臓器別授業と並行した臓器別医学英語授業を3年次（後期）と4年次（通年）に実施している。その大きな特徴は、本学の臨床部門の先生方の並々ならぬご協力を得て、臨床と語学を密接に関連させた medical English の授業を行っているということである。学生は6つの少人数クラスに分けられ、授業内容やレベルの均一化を図るため、全クラス同時進行型のレクチャーにしたがって、6名の医学英語教育・医療通訳などの経験豊富な語学専門教員が授業を担当している。各教室以外に双方向性視聴覚システムを備えたモニター室が設置され、臓器別授業に合わせて当病院臨床専門医を招き、臨床に関する学生からの質問にリアルタイムで返答している。このシステムは、2004年から2008年まで、第一内科の大屋敷一馬主任教授が事業推進責任者となり、文部科学省より受けた8,000万円の現代GPの補助金を利用して備えた他では類を見ないもので、国内外からの問い合わせや見学希望者も多い。

授業内容は、ブルーヘルマンス准教授を中心に構築され、使用している教材は、Terminology（臨床医が選択したその臓器モジュールでの最重要単語集）、Clinical Concepts（臨床医に執筆いただいた原稿を当講座で英訳したもの）、Selected Readings（New England Journal of Medicine の許可を得て原著論文の Introduction を無料でそのまま使用）、Doctor-Patient Consultations（医療面接）の4つに分かれている。医療面接は、イギリスのレスター大学の協力を得、医師・患者全員の理解を得た上で、すべて実際に行われたイギリスでの面接を使用しているのが特徴である。当初、教科書の形だった教材は、2008年2月に、すべてインターネットで公開された（www.emp-tmu.net）。このサイトは、世界中どこでも誰でも、利用登録をするだけで無料で利用することができる画期的なものである。サイトの設立から3年足らずで、現在世界114カ国以上からアクセスがある。2009年6月には、中国の南方医科大学の医師達による本学の医学英語教育システムに関する論文¹⁾が、中国の有名な社会学の学術誌、「中国外語」に掲載された。このことから、東京医科大学の医学英語教育システムが、国内のみならず国際的にも注

目を集めていると言えよう。

2. 大学院教育

1年間にわたり、将来のキャリア構築につながる論文投稿、出版、国際学会でのプレゼンテーションに必要な基礎的な知識（Peer Review System, Vancouver Style, 出版倫理など）を得られるよう、日本で数少ない医学英語コミュニケーションの授業を行っている。これらの講義は録画され、大学のLANを通じて学内でいつでも視聴することが可能である。

教育については、理想的には本学に入学直後から研修医、大学院生、卒後医師になった後までも受けられる、医学英語教育を含む総合的な医学コミュニケーションの教育制度を作る必要があると思う。それによって、本学に、より優秀な学生、研修医、大学院生が集まってくると考えられるからである。これについては後述する。

3. スタンフォードアメリカ医療研修

私は、医学生のうちから視野を広げるために、外国医療制度を体験することが大切だと考え、16年前に、アメリカのNGO、Volunteers in Asia (VIA) や東京女子医大の先生方と協力し、スタンフォード大学医学部の支援を得て、「スタンフォードアメリカ医療研修」というプログラムを立ち上げた。以来、毎年春に計30名（本学からは約10～12名）の学生が2週間アメリカで研修を受けている。学生達は期間中、スタンフォード大学およびカリフォルニア大学サンフランシスコ校の学生達と行動を共にするため、知的刺激に富んだ国際交流が体験できる。また病院・ホスピス・クリニックやホームレスのための医療センターへの訪問、HIV陽性患者・臓器移植経験者との懇談、医学生との医学倫理に関する討論などを通して、医学知識を高められるだけでなく、将来を担う医師として国際的視野にたつて物事を考える貴重な機会を得ることができる。本プログラムは、その充実した内容から年々人気が高まり、今年は、本学、東京女子医科大学のみならず、愛媛大学、日本大学、東京大学などからも多数の応募があった。また帰国した学生たちからは、とても充実したプログラムで、「日本の医療システムや教育システムを客観的に見るができるようになった。」「医師になることに対してモチベーションが上がった。」「後輩にも是非勧めたい」などの声が届いている。

今後もより一層多くの学生に参加してもらい、海

外での見識を深めて国際的に活躍できる医師を本学から輩出したい。

情報の発信

1. 院内校閲サービス

1991年に本学に、アジア初の国際医学情報センターが設立されて以来、当講座の大きな使命の一つは、学内・院内の医師が執筆する医学論文がトップ医学ジャーナルへ掲載されるよう行っている校閲サービスであると考えている。1991年当時、Medlineに登録されているジャーナルへの本学からの論文の採用数は年間40件だったものが、この20年で約5倍の200件以上に増えていることは、大変喜ばしいことだが、アメリカの大病院のそれと比べると、まだまだ少なく、更に増やす余地があると思う。

当講座の校閲サービスの特徴は、① 著者・校閲者間のマンツーマン個別面談 ② ピアレビュー後も論文のアクセプトまで完全なサポート ③ そのまま投稿できるクリーンコピーと変更履歴(校閲の履歴)がわかる pdf ファイルの返却、の3点である。以上の院内校閲ならではの特徴を生かし、外部の校閲会社との間では不可能な、著者と校閲者の顔が見える緊密な連携の下、きめ細かいサービスを心がけ、トップジャーナルへの掲載を増やし、ひいては東京医科大学の発展に寄与したい。幸いなことに、昨年9月より当講座に医学分野の研究・校閲経験豊かなシニアエディターが加わり、当講座の校閲チームは現在私を含め、3名体制となり、今後、論文のアクセプト率が向上することが期待される。

2. 医学コミュニケーション・医学英語論文投稿支援ウェブサイトの企画・運営

2006年、私はある製薬会社の後援を受け、ブルーヘルマンス准教授と協力して、医学コミュニケーション・医学英語論文投稿を支援するための大規模教育ウェブサイトを立ち上げた。これが ronbun.jp である。医学コミュニケーションとは何か、投稿論文のまとめ方、査読者の視点については、いずれも動画でレクチャーを視聴することができ、また、論文投稿までのステップ(Q&A形式)やカバーレターのサンプル集は論文投稿に慣れていない著者に役立つことだろう。また、私が、英国の Committee on Publishing Ethics (COPE) の会員として関わった、論文投稿における倫理違反行為防止フローチャートは、最近ますます生物医学出版分野で関心が高まっ

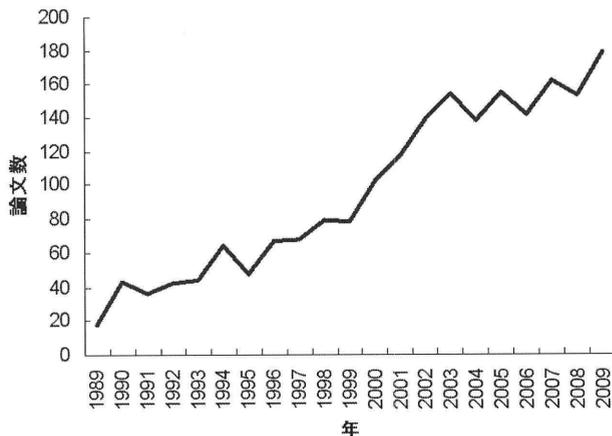


図1 Medline 登録雑誌における東京医科大学からの論文数

英語論文校閲サービス

東京医大の先生方・スタッフの皆様方のみを対象に
医学英語論文の校閲を受け付けております。

著者・校閲者間のマンツーマン個別面談 **個別対応**

ピアレビュー後もアクセプトまで完全サポート **フルサポート**

変更履歴付ファイルと
そのまま投稿できる
クリーンコピーをご返却 **電子方式**

3名の専門チームが綿密に校閲 **高品質**

R. ターナー
英語ネイティブスピーカー
医学知識者
語法・構文・文法チェック

E. パロガ PhD
講師・シニアエディター
医学研究、書誌、医学知識者として15年以上の経験有
科学的に内容を吟味・
論理の流れのチェック

J. P. パロン
主任校閲
総合チェック

校閲お申し込み・詳細は当講座ホームページへ
www.tokyo-med.ac.jp/dimc
お問い合わせは、国際医学情報学講座(内線 5921)までお願い致します。

図2

ている倫理的側面を扱ったもので、ケース別にフローチャートをたどることにより、研究と出版をめぐる倫理違反行為を未然に防ぐことができる。

さらに、私が、アメリカの著名な医学ジャーナル CHEST の依頼により同誌編集委員として、約5年間にわたり企画した Medical Writing Tip of the Month (「論文投稿のコツ」) シリーズ²⁾ は、世界一流の執筆陣が英語論文投稿や医学コミュニケーションにま

つわるさまざまな話題を取り上げて執筆したものであり、CHEST 誌の許可を受けて日本語に翻訳されている。毎月更新される英日対訳は 40 本以上のほり、生物医学分野の大学院生や研究者にとって興味深く役立つ内容だと思う。

誰でもどこでも無料で利用できる、www.ronbun.jp のサイトは、「かゆいところに手が届く英語論文投稿のノウハウ」、「後輩の論文指導に最適」など、利用者からも好評である。今後は、倫理研究と出版倫理に関するガイドライン集や PubMed の使い方などを加えて更に内容を充実させ、ますます利用者の便宜を図ってゆきたいと考えている。

将来への展望

1. 教育

(1) MA/PhD コースの創設

一昨年 7 月に、臼井学長の多大なご助力により当講座はセンターから講座に昇格した。これは、私の知っている限り、世界で初の International Medical Communications Department である。今後は、医学コミュニケーション分野の MA や PhD を取得できるコースを創設し、国内外で新たに設立が期待される「医学情報センター」の中核を担う医学コミュニケーションのスペシャリストを育成してゆきたい。

(2) 医学英語教育の標準化

私は、2004 年に日本医学英語教育学会に、医学英語標準化のベースとなりうる医学英語検定試験の創設を提案し、2007 年の 2 回のパイロット試験を経て、2008 年 4 月から正式に医学英語検定が実施されるようになった。第 1 回検定の 1 ヶ月後に、厚生労働省が翌年度から医師国家試験に医学英語を初出題すると発表をしたことは画期的なことであった³⁾。まだ、国家試験全体の問題数に占める英語の割合は少ないものの、今後、医学コミュニケーションの重要性が高まるにつれ、増えていくものと思われる。また、いずれ、全国共通医学英語カリキュラム作成の機運が高まれば、当講座が先頭に立って、国内の医学英語教育の標準化⁴⁾に貢献できるものと思われる。

(3) 医学英語検定の国際スタンダード作り

ヨーロッパでは医学英語検定の統一を図ろうという動きもある。

すでに独自の医学英語検定を持つ日本とハンガリーが主体となり、2008 年から国際医学英語検定

試験を創設するべく、ヨーロッパの 10 カ国の中で特に熱心な専門家達数人と定期的に LAN ビデオ会議を開いており、EU からの助成金調達を目指している。

2. 情報の発信

(1) 施設内で論文の校閲や学生の教育を行う「医学情報センター」の重要性⁵⁾を広く伝え、本学同様のセンターを設立したいという施設に対し、ノウハウを伝えてゆきたい。

国内では、2008 年に日本大学医学部の医学教育企画・推進室内に医学英語部門ができ、2009 年には、東京女子医科大学でも院内校閲サービスが始まり、同様のセンターを創設したいという問い合わせも多くなっている。

海外では、私が昨年秋にソウル国立大学に出張した折に、同大学ブンダン病院の顧問教授を拝命し、以来、同大学に具体的に様々な助言を行い、医学情報センター設立に向けてのサポートを行っているところである。

(2) 論文と研究者に対する評価は、年々ますます厳しくなりつつある。その一例が、Impact Factor の高い雑誌への掲載件数のみで著者の学問的貢献を評価するのではなく、個人あるいは個々の論文を評価する Hirsch Index も重視され始めているということである。すなわち、Impact Factor の高い雑誌であっても、その中の 1 個の論文の引用率が低ければ、その Hirsch Index は低くなり、逆に、Impact Factor の低い雑誌であっても、その中の論文が頻繁に引用されれば Hirsch Index は高くなる。つまり個人の評価を重要視する方向へ向かっているということである。

(3) 当講座では、質の高い綿密な校閲を行うだけでなく、今後は、先生方からご要望の多い医局/分野別教育を実施してゆきたいと考えている。医局ごとの実情に合わせ、例えば、国際学会でのプレゼンテーションの支援などを行ってゆきたい。

3. 研究課題

患者・医師間のコミュニケーションについての研究（対象：患者）、e-learning の研究（対象：学生・教員）

(1) PRO (Patient Reported Outcomes: 患者立脚型アウトカム)

従来の臨床試験では、医師が医師の視点で用いる客観的評価指標だけが使用されてきたが、最近はその

れだけではなく、患者自身による主観的評価を取り入れ、QOLを上げることが重要視されるようになってきている。またそれに伴い、様々なQOL尺度が開発され、それを用いてQOLを定量的に測定し、臨床現場で活用されるようになってきており、質問票の翻訳や開発などを通して当講座でも研究を行ってゆきたい。

(2) 医師・患者コミュニケーションと患者教育用資料の開発

多忙な医師達にとって、患者との円滑なコミュニケーションのためには、優れた患者教育用資料の存在が不可欠である。当講座は、それらを翻訳・開発することにより、医師・患者間の意思の疎通を密にし、患者の満足感を高め、ひいては、訴訟などのリスクを回避し、リスクマネジメントにつなげることができれば、と考えている。

(3) e-learning

現代GPで作った医学英語の無料のウェブサイトは、かろうじてe-learningの一種といえるかも知れないが、きわめて原始的なものである。今年度より、東京医大は学長の臼井先生、常務理事の関口先生、金沢先生、行岡先生のリーダーシップの下、卒前教育、卒後教育を問わず、広く本学での教育を補うe-learningシステムを始動させようとしている。このプロジェクトは、ブルーヘルマンス准教授、医学教育学講座の大滝主任教授、泉教授を中核構成メンバーとするe-learningワーキンググループが、医学英語EMPサイトの医療面接の作成者である、英国レスター大学のブラックウェル先生と協力して、今後の発展を目指す。更に、e-learningシステムの導入の前後で効果を比較することにより研究を行うこ

とが可能だと思う。東京医大の考え方が他の医学部のもとの異なる点は、大部分の他大学がメディア会社から高額なパッケージを買い、それに自分達の教育を合わせなければならないのに対し、本学はそれとは逆の考え方で、まず本学のニーズを認識し、それに合うものを作り、徐々に学生と教員双方が使いやすい効果的なものを作っていくという点である。私は、将来的には東京医大のOBも使えるようなシステムが構築されることが好ましいと思っている。

最後に、本学は医学英語に力を入れているが、これは英語を習得するためのプログラムではない。英語を道具として用い、患者さんのために、よりよい医師、看護師、パラメディカルを育てるために英語を利用するという考え方である。本学特有の資源を皆が十分に活用し、自主自学の精神で頑張っていくことを切に希望する。

文 献

- 1) 呂桂梁平：Chung Guo Wai Yu (Foreign Languages in China)：73-78, March, 2009
- 2) Medical Writing Tip of the Month Series, Postgraduate Education Corner, CHEST, 2006.3-2010.9
- 3) 加我君孝：医科大学における医学英語教育の現状に関するアンケート調査報告。医学教育 **25**(3)：160-165, 1994
- 4) J.P. Barron：A Fundamental Approach to Radically Improve English Education in Japanese Medical Schools：医学教育 **40**(2)：113-115, 2009
- 5) J. P. バロン：医学情報センターの役割と必要性。医学教育 **33**(6)：450-453, 2002